やまぼうし通信

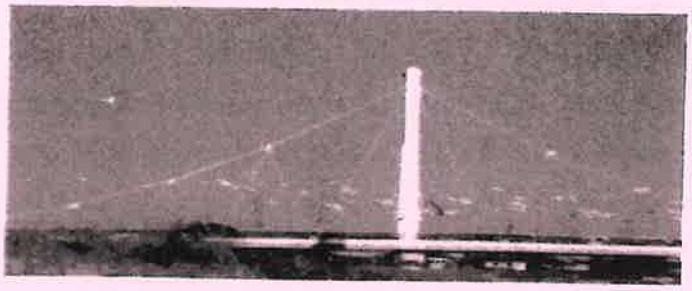
NO. 125　2022年1月24日

やまぼうし新時代の幕開けです。次の20年に向けて飛び立つ時を迎えました！

やまぼうしの過去・現在・未来　20周年記念　特集号

理事長　伊藤　勲

皆さま、賀年あけましておめでとうございます。



昨年は、法人設立後20年の節目の年で、いわば成人期に入ったのです。年明けした元旦の朝、ふれあい橋周辺でも浅川を乱舞する鷺の群れに目を奪われました。浅川にアユをはじめ多くの魚が蘇生し、それと共に多様な野鳥が戻ってきている風景に触れ感無量でした。

鳥は空に、魚は海に、人は社会に！が　私達の合言葉

いよいよ世代交代を実行する年を迎えました。NPO法人はミッション（使命・基本目標）が命です。**法人創設時からのミッションを堅持するとともに、新たな時代の要請に応えられる事業執行体制を固めることが、最大の課題です。**この間、私達を取り巻く社会経済環境は大きく変化しました。とりわけ、地球規模の環境破壊が深刻化し、新型感染症が世界を席巻しています。大地震や火山の噴火が世界各地で頻発しています。そうした状況下で、コミュニティが崩壊し、貧富の差がかってなく拡大しています。孤独死する方が急増し高齢者層だけでなく、若者・子どもまでまきこんだ「ハウスレス」が全世代に拡大しています。さらに「戦争の危機」も高まり「戦争のできる国」づくりが一気に進みかねません。このままでは21世紀は「絶望の世紀」になるのではとの危惧を抱いています。**「政治の貧困・無策」を超克するには、「地球規模で物事をとらえ、ローカルコミュニティをベースに行動する」市民連帯活動がどこまでパワーアップし「ソーシャルチェンジ」出来るかにかかっています。**とりわけ、**障害者の命と暮らしを支えぬくためには、法人外の市民パワーとどう協働していくかが問われていると考えます。　やまぼうしは、これまで、幾多の先駆的開拓的事業にチャレンジしてきました。**コロナ禍で、**法人創設20周年事業を10周年の時と同様に実施することは困難と判断し、法人の事業の再編強化に集中する年とします。**その際、何故現在のような小規模分散型の事業展開をしてきたのか、その怨いを受け止め、継承・発展させる志を共有することが不可欠です。**法人設立までの歴史と創設後の事業の歩みを振りかえり、次の20年を展望したソーシャルアクションの課題を共に考えていただける年になることを切望いたします。

1．1970年代～　脱施設・おちかわ屋創業期　～　施設的暮しからの脱却を求めて　街の八百屋を創業

1970年に当時東洋一の障害者総合施設とみなされていた都立府中療育センターで、**障害者を医療モルモット扱いしているとして、入所者有志が抗議のハンガーストライキに立ち上がりました。施設収容主義の施策の根本的転換と地域で生きる道を切り拓く当事者の命がけの闘いが開始されたのです。**その中心的存在が、三井絹子さんと後におちかわ屋の所長となる重度脳性麻痺者の志野雅子さんでした。都民生局（現福祉保健局）に入都し、七生福祉園で仕事を開始したばかりの私には、障害当時者から鮮烈な「洗礼」でした。「施設の抜本的改革」は私のライフワークとなったのです。**1980年に国連の障害者年がスタートし「障害者の完全参加と平等」の行動計画が始動**しました。**都は府中療育センター問題を解決することが不可避となり、日野療護園が開設**することになりました、私は、開設担当で、主に「日中活動」のプログラムを担当しました。**府中療育センターからの移転組を中心に、施設の規制緩和だけには飽き足らず、地域で生き、働く道を自前で確保したい**との声が上がりました。入居者自治会と手を組んで、公的助成金が受けられない状況の中でも、**街中に「自然食品の店おちかわ屋」を創業したのは1983年**でした。施設入所者がそうした場を開業

した前例は全国的にもなくなく、周囲から「あんなの半年でつぶれるよ」と冷笑されていました。しかし、**福祉業界の常識を覆し今日まで40年近く、「おちかわ屋」は地域に根付いて事業を継続し**ています。

1980年代の浅川の環境汚染は深刻で、こども達の遊泳も禁止される「汚染された川」で、市内の水田も工場から排出された「カドミウムの汚染田」でした。日野療護園に隣接していた「千代田自然学園」（千代田区の林間学校・現在の落川交流センター）は閉鎖されたまま。また、障害者施設は七生福祉園・光の家・多摩療護園などの入所施設だけで、通所事業所は「ひの共同作業所」一カ所だけでした。そうした中で、おちかわ屋は「浅川を子どもたちが泳げる川に再生させよう」と「**浅川勉強会」（山本由美子代表・やまぼうし初代理事長）を軸に「浅川水辺の楽校」などの活動を展開し山本さんは「環境大臣賞」を受賞しました。**日野市の「緑と清流課」とおちかわ屋はこの当時から緊密な関係でした。**今も、おちかわ屋は「日野用水守」の活動を継続**しています。

2．1990年代～ワークショップによる　まちづくり展開期　～　市民版まちづくりマスタープランを提言

1990年からおちかわ屋は小規模作業所「ワークショップおちかわ屋」となり、在宅障害者も数多く受け入れるとともに、多摩療護園から最重度身体障害者の宮崎譲二さん（元府中療育センター在所生）が、光の家からは盲聾の重複障害者の佐藤栄さんが施設の反対を跳ね返して地域自立に踏み切り、地域居住を実現しました。佐藤さんは、公営住宅でいまも地域自立生活を持続し、おちかわ屋に通所しています。おちかわ屋は、多くの市民の皆様と協働してバリアフリーのまちづくりに参画、当事者目線から、佐藤さんは、点検・提案されました。そうして、様々なワークショップを積み重ね、「障壁のない地域社会日野を創る会」の活動を本格化しました。

1995年には「市民版まちづくりマスタープラン」をまとめあげ、宮崎さんは、「第2章人よまちに出でよ～このまちの主人公たち」を担当・執筆し，私は「**市民自治型福祉」を提言**しました。全国でも初めての本格的な市民主導のマスタープランとして注目されました。その後、1998年に阪神淡路大震災の救援活動を機にＮＰＯの活躍が評価され、ＮＰＯ法の成立の原動力となりました。法人化の道を模索していた**「ワークショップおちかわ屋」は、社会福祉法人化の道を選択せず、障害当事者もまちづくりの主役になれる法人としてＮＰＯ法人を選択しました。**創設時の法人理事会には、副理事長に志野雅子・理事に須永照明・二宮博之の重度障害者3名が就任されています。もう一人の副理事長の草場さんは、私の50年来の親友で、長年就労困難者の就労・生活支援に取り組まれてます。

3．2000年代～法人事業　基盤整備期　～「地域の困りごと」に応える事業展開がやまぼうしの「ミッション＝使命」に

法人化して最初の事業は**「農あるまちづくりへの障害者等参加試行事業」**でした。「2002年度高齢者・障害者福祉基金」の助成を受けて、「市内の有休農地」での「国産大豆生産プロジェクト」等の取り組みを開始しました。**2003年には交流サロン「べらもんと」、2004年には、里山倉沢の保全のため「里山耕房くらさわ」を開設**しました。

都は1973年からグループホームの法制化がない中で、独自の生活寮制度を創ってきました。しかし、一般就労・福祉就労出来ている人が対象で、重度の方の入居は出来ませんでした。やまぼうしは、**2001年に重度生活寮「みお」を開設しましたのを皮切りに、「わんど」「ののか」「つぐみ」「げん」を相次いで立ち上げ**、施設に長期収容を強いられてきた方がたの「地域移行」の受け皿づくりに先導的な役割を果たしています。さらに、自然食の共同仕入れで繋がってきた増島商店の建て替え計画に合流し、**豊田駅南口商店街の一角で、1階が郵便局と自然食品の店「増島商店」、2階はべらもんとを移転し、新たにコミュニティカフェ「れんげ」（就労移行支援事業所）とヘルバーステーション「みずぐるま」、3階には重度身体障害者グループホーム「げん」と短期入所「あかとんぼ」が入る3階立ての多機能複合型事業拠点を開設し**ました。こうした事業所は全国的にも前例がありませんでしたが、**第1期日野市地域福祉計画での福祉住区構想（中学校区ごとに拠点整備する）の提案の具現化**として可能となりました。2006年には、八王子の「由木かたくりの会」が社会福祉法人となることになり、開設準備委員であった私が、初代の「総施設長」を3年間勤めさせていただきました。その後、**2008年には、平山台小の廃校跡地に開設された「平山台健康支援センター」内に、日野市の障害者生活就労支援センター「くらしごと」を、2009年には、地元自治会の要請を受けて、給食調理室を活用した「セントラルキッチン」と生徒用玄関を改修してのカフェを開設**しました。

4. 2010年代～ スローワールド事業 展開期 ～ 農と食を軸にしたスローワールド事業の展開

2010年に明星大の学生カフェ創設支援への要請を受けて立ち上げたカフェ「スターショップス」、は全国でも初めての学生カフェとして注目されました。さらに、2011年4月には、法政大多摩キャンパスに「エッグドーム・スローワールドカフェ」を開設。2012年には日野市の文化スポーツセンターふれあいの森に「スローワールドカフェ」を相次いで開店しました。こうして「コミュニティカフェ」事業が、やまぼうしの中軸事業に発展してきました。さらに、農福連携事業を本格化させる「自立と共生のスローワルド事業」を由木かたくりの会、多摩草むらの会、「富良野べらもんと」と連携して立ち上げました。2014年には念願だった「認定NPO法人」の認証を受けました。「里山耕房くらさわ」は生ごみたい肥化事業で連携してきた「鈴木牧場」の体験農園に活動拠点を移行することになりました。そして豊田に事業所を移転し、今日に至っています。

2015年2月には、法政大エッグドーム　スローワールドカフェを会場に、第2回「農と食　若者　障がい者の社会的事業所」を創るセミナーを共同連・ワーカーズコレクテイブ協同組合と共催で開催しました。テーマは、「地域で若者　障がい者の「共に」働く場を創りすためにー労働統合型の社会事業所をもっと大胆にー」で、司会進行は、柏井　宏之（NPO法人共生型経済推進フォーラム理事・現やまぼうし理事）。同題提起者は①虫の眼「スローワールド事業」＆鳥の眼「物流のコンソーシャム」へ伊藤　勲②「農福連携事業」の現状と工賃（賃金）改革の課題　濱田　健司（JA共済総合研究所主任研究員）③地域での「社会的企業」支援と生協の役割　村上　彰一（生活クラブ生協専務理事）、各地からの提言では①山梨八ヶ岳名水会②山形月山福祉会③多摩「あしたや共同企画④埼玉見沼田んぼ福祉農園があり、社会的事業所とスローワールド事業への期待が高まりました。

当時、日野市はダストボックス方式を採用し、分別収集は三多摩でワーストワンでした。そうした状況から脱却するため、家庭用生ごみのたい肥化事業を開始しました。くらさわが中心となり、法人が自前で、小型ダンプを購入しました。やまぼうしの「水と緑の循環プロジェクト」の代表は松山禎之さんで、主要メンバーは今の「せせらぎ農園」を牽引されている佐藤美千代さん・明峯淳子さんでした。もちろん「くらさわ」のメンバーも回収作業の主力でした。今日、日野市はごみゼロ宣言都市となり、一昨年　プラごみリサイクル工場を開設し、障害者等就労困難者の就労の場を創りだしています。

5. 2021年～　社会的企業（ソーシャルファーム）の創生期 ～プラットホーム型事業との提携の模索

やまぼうしは、この3年間　基本的事業目標として、社会的企業の創出を掲げてきました。やまぼうしの事業規模をこれ以上拡大せずに、新たな事業基盤を創るために、一般社団法人ミレットロードをたちあげました。ワーカーズコープの呼びかけに応えて、「社会連帯TOKYO」に参加し、協同組合との協働を模索しています。やまぼうしの法人会計とは完全に独立し、コロナ禍の逆風が吹く中でも、着実に事業基盤を固めてきています。

①ミレットロードは、一昨年日野市が開設した清掃工場の「プラスチック類手選別ライン」での障害者等就労困難者の就労支援事業に参画し、昨年4名の方が採用となりました。そのうちの1名が、やまぼうし平山台とグループホームつぐみの利用者で、元気に就労を継続されています。

②ミレットロードは、今年度より、国立市にある都多摩障害者障害者スポーツセンター内のカフェ事業を受託しました。コロナ禍でカフェの通常　営業　が出来ない中で、ソーシャルファーム（社会的企業）として、8名の方の雇用を確保するために、デリバリー方式の配食事業と三河屋さんのおからの乾燥・粉末化の事業等に取り組んできています。やまぼうしや他法人のグループホームへの「真空パック方式」による配食事業や日野市のデイバリー事業でも主要な役割を担っています。

③新年度より一般社団法人「コミュニティネットワーク協会と事業提携して、多摩ニュータウン再生計画の一環として、国土交通省の認定事業として都住宅供給公社からの一括借り上げで、「松が谷商店街の大型空き店舗(900㎡)を中心にしたプラットホーム型ソーシャルファームの新規事業所の共同経営の体制整備を進めています。　松が谷では、ミレットロードのセントラルキッチンとして、「惣菜製造・加工場（約130㎡）を開設するのとあわせて、障害者就労B型事業所「たまてばこ」をコミュテイ協会と連携して開設する準備を進めています。本年2月から改修工事に入り、7月には事業開始する予定です。当初は20名規模でスタートし、順次定員拡大し、50名規模の事業所をめざします。

ミレットロードが提案している　「たまてばこ」の事業プラン（案）

1）「就労継続B型事業所　たまてばこ」は、ミレットロード運営協議会に参画し、4つの役割を果たす事業所です。

①「プラットホームたまてばこ」の一員として、「多摩の100年コミュニティのまちづくり」に参画します。
②支援者と利用者の立場を超えて、コミュニティ・ビジネスでのそれぞれの役割をシェアします
③誰もが地域で自分らしく働き・暮らせる多様なワーク&ライフスタイルの創造にチャレンジします。
④利用者は、福祉サービスの受け手であるだけでなく、街づくりの担い手としての役割を担います。

2）B型「たまてばこ」は利用者・スタッフが全員　3つの作業チームで仕事をシェアします。

①チームはこび屋　（健康食材の仕入れと販売・移動販売・健康増進プログラムの企画・実施）

②チームよろず屋　（各種工芸。ラベル・名刺製作・魅力ある各種イベントの企画・店舗の清掃、）

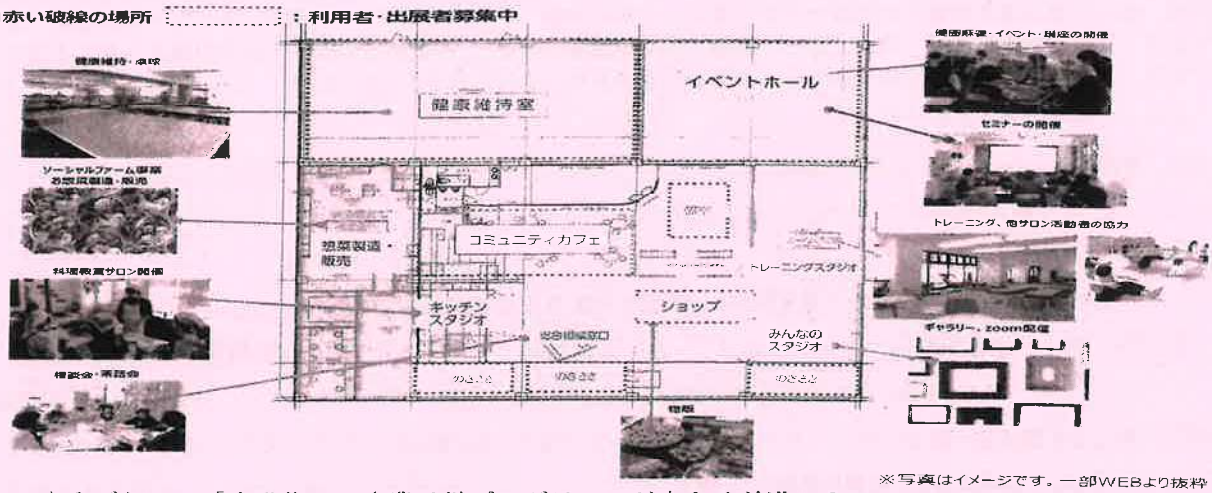
③チームいろり屋　（オリジナルな屋台販売のサポート&乾燥野菜・干物づくり・炭薪づくり）

※ **「たまてばこ」の事業プランは、これまでのやまぼうしの事業の蓄積の中で生まれました。地域分散型の事業方式の良さをいかしながら、それぞれの役割をはたしつつ、地域再生・活性化事業のプラットホーム（重層的・多元的事業ネットワーク）をプロデュースできる「コア事業体」へとステップアップすることを目指しています。**

福祉就労から中間就労（ソーシャルファーム）へ、中間的就労から提携企業への就労へとステップアップするロードマップを開拓します。

また、誰もが高齢期を迎えても、安心して暮らせる居住支援システム（必要なサポート付き地域分散型ホーム）の構築が重点課題。

※**「多様な働く場&暮らしの場づくり」**をコミュニティネットワーク協会・ミレットロード・提携企業（多摩防水等）との間で共有します。また、新たに導入された**就労B型の報酬 加算①地域協働加算②ピアサポート加算の積極活用**を進めます。やまぼうしの事業執行体制の再編強化と合わせて、ミレットロードの事業の進捗状況を見定めながら**「スローワールド事業」を継承・発展させる事業提携の可能性を探っていく**予定です。**また、産官学民連携とワーカーズコープ・生活クラブ・バルシステムと地域協同組合・社会的協同組合化も含むプラットホーム形成にむけた協議を開始します。**



※写真はイメージです。一部WEBより抜粋

※この１年で、やまぼうしの「次世代への事業承継プログラム」が大きく前進しました。その推進軸を担っているのは、法人の中堅層で構成されている**「エンプロジェクト」**です。　やまぼうしが、20年後も持続可能な法人であるための課題を整理し、精力的に活動を展開されています。**詳細は次号で報告**させていただきます。】

日野市内の福祉施設でも感染者が出たとの連絡が入り始めました。自宅療養中の重症化も懸念されます！

保健所の指示を期待できない状況です。各自・各事業所で迅速な対応をお願いします。

1，【自宅療養中に容態悪化したら、迷わず１１９番してください。】
　東京都は、以下の一つでも該当した時は119番することを呼びかけています。
　①顔色が明らかに悪い　②唇が紫色　③急に息苦しくなった④胸の痛みがある⑤意識がもうろう⑥血中酸素濃度が９０％以下。

2，【一つでも該当したら　法人本部　事業部責任者　医療機関に連絡してください。】
　①せきがひどい　②たんが多い　③発熱が続く　④食事やトイレがつらい　⑤経験したことのないけん怠感
　⑥血中酸素濃度が９３％以下。

3，【家庭内感染を防ぐために】　①部屋を分ける　②世話をする人を限定する。③共用部分を消毒する

4，【三密（密閉・密集・密接）をしない。】
　①他の人と十分な距離をとる（2メートル）②窓やドアを開け、こまめに換気を　③屋外でも密集するような運動を避ける。（少人数の散歩やジョッキングなどは大丈夫。）④会話をする時は、マスクを着ける。⑤電車やエレベーターでは会話を慎む。

5，しばらくは、厳寒期が続きそうです。いつもより体調管理に気を付け、風邪にかからないよう　厚めの衣服や防寒対策をしっかりしましょう。いつだれが感染・発症してもおかしくない市中感染の蔓延状態です。各自・事業所での食料の備蓄（缶詰類・レトルト）なども心掛けてください。持病を持っている人は、陰性と診断されても、症状が悪化することに注意しましょう。

《事業資金カンパ・会費納入へのご協力に感謝申し上げます。引き続きご協力お願いします》

寄付者名簿　2021年10月1日～12月31日　（敬称略）　大口寄付：㈱瀧澤建設・小林則男　　会費：井上早織・須田文子・須田昌宏・森野文恵・田中美香・末元恒昌・鈴木英規・安田美江・矢﨑功・矢﨑潤子・矢﨑信光・小林美恵・松原菜緒・米山喜良・草場清則・西方智尋・中村渥子・竹峰誠一郎・都倉高久・藤原多恵・寄付：井上早織・須田文子・末元恒昌・安田美江・東深澤哲・桒原ミチ子・草場清則・菊池幹子・伊藤勲・伊藤陽子・松原弘毅　　振込先　ゆうちょ銀行　９９００　店番０１９
当座　０１２３９８４　特定非営利活動法人やまぼうし
【郵便局　記号００１００－７　番号　１２３９８４　特定非営利活動法人やまぼうし】

発行元　認定ＮＰＯ法人やまぼうし
〒191-0062 東京都日野市多摩平２－１２－２
Tel　042-581-7946
Fax　042－514－9507
E-Mail　info@yamabousi.org
URL　http://yamabousi.org/